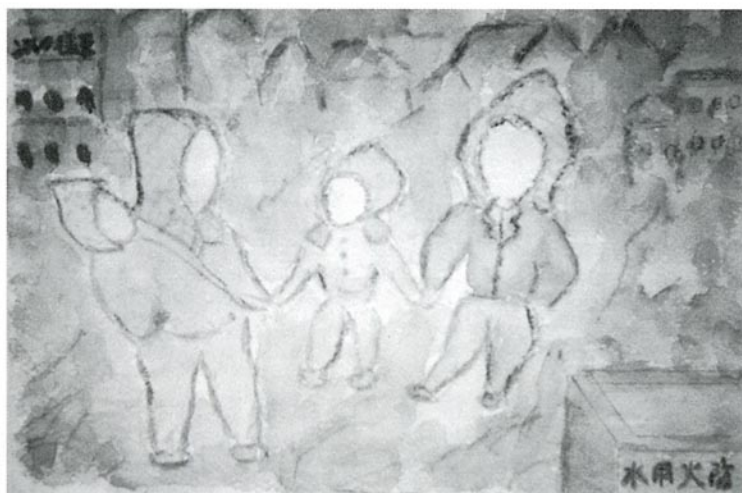


かたりべ 78

豊島区立郷土資料館だより

空襲の記憶



今年のアジア太平洋戦争の終結、そして東京が空襲を受けてから六〇年になります。郷土資料館では、これまでも戦争に関する展示を開催してきましたが、七月二七日から九月四日まで「東京空襲六〇年」空襲の記憶と記録」という企画展を開催いたします。

この展示会は今年一月から四月にかけて、江戸東京博物館とすみだ郷土文化資料館で開催された同名の企画展と協同開催という形をとっています。今回の展示で新しい知見として提示したいと考えていることは、「USSBS（アメリカ戦略爆撃調査団報告書）」や、二〇〇二年に発見された空襲犠牲者約三万人分の名簿である「都内殉難者霊名簿」を分析・検討することにより、より一層明確な東京空襲の実相を明らかにすることです。

もう一つ、今回の展示の中心になるのは「空襲体験画」です。「空襲体験画」とは、空襲経験者（被災者）が、自らの記憶にもとづき、自らの手で空襲の様子を描いた絵です。

これらの絵は、昨年の八月から江戸東京博物館・すみだ郷土文化資料館と一緒に募集し、多くの方々にご応募いただきました。そして、今年の一月から四月にかけての両館の展示で、紹介されました。この時の展示では三月一〇日の下町方面の空襲の様子が描かれたものが中心となっていました。当館での展示は、豊島区が空襲された四月一三日を含む山の手方面全般の空襲に関する「空襲体験画」を展示する予定です。ここに紹介している仁平和子さんの絵も、四月一三日の空襲体験の様子を描いたものです。これらの絵からは、実際の空襲時の様子を伺い知ることができ、制作者の空襲や空襲で犠牲となった方々への深い思いも伝わってきます。

この「空襲体験画」は七月上旬まで募集を続けております。詳細については郷土資料館までお問い合わせ下さい。一人でも多くの方々のご応募をお待ちしております。

（伊藤）

二〇〇五年度第一回企画展

「東京空襲六〇年」空襲の記憶と記録」

展示内容をちょっとだけご紹介しましょう！

本号の表紙でも紹介しましたが、七月二十七日（水）からはじまる企画展の展示内容について、もう少し詳しくご紹介しましょう。

▲1▼ 戦争と豊島区へ空襲の背景

豊島区は、一九四五（昭和二〇）年四月二三日に突然空襲に見舞われたわけではありません。空襲の前提・背景には、

一九三七年の日中戦争開始以来継続されてきたアジア・太平洋地域での戦闘行為があります。それらとの連関の中で生じたのが豊島区への空襲でした。ですから空襲に見舞われた背景を知るために、戦争当時、豊島区の人々がどのような生活を送っていたのかについて、隣組に関する

▲2▼ 空襲の実相

当館には、区民の方々の寄贈をはじめとするご協力により、空襲の凄まじさを物語る資料が多数収蔵されています。しかし、それらの被災品の中には劣化が激しく、展示に耐えない資料もあります。今回は、空襲六〇年という節目の年でもあることから、保存状態の状況から、これまで展示する機会が少なかった焼けた本や、空襲時の熱で溶けた薬瓶（左の写

真）も展示します。また、その他の被災品も合わせて展示し、空襲の実相を、モノから示していきます。

▲3▼ 米軍の記録

今回の展示では、四月一日の空襲の実態をより明らかにするために、作戦を遂行した側、すなわち米軍資料を使用します。日本空襲の実態を解明するため、米軍資料がさまざまなところで利用されてきましたが、本館はこれまでそれらの従来研究に依拠して、独自の調査はしていませんでした。

そこで今回、国会図書館所蔵のUSSBS（アメリカ戦略爆撃調査団報告）中の第21爆撃機集団文書（Tactical Mission Report）Damage Assessment等）を用いて豊島区とその周辺に対する空襲の状況を実証的に明らかにしていきたいと考えています。四月一日空襲については、米軍資料の本格的利用はおそらくはじめてのことだろうと思われま

す。問題の焦点の一つは、米軍の爆撃目標と実際の爆撃地・被災地とのズレです。なぜ爆撃目標が「東京兵器廠地域」とされているが、焼失地域のほとんどが住宅地だったのか、その理由を探ります。

▲4▼ 被災の記録

東京都公園課が作成した「区内殉難者名簿」という資料が二〇〇二年に発見されました。これは、東京都への空襲で被災し死亡した人々の名簿で、約三万人分

の氏名、住所、遭難地（死亡場所）、仮埋葬地などのデータが含まれています。四月一日空襲の豊島区に関する部分については二〇〇二年度の企画展「豊島区空襲」戦時下の区民生活」で紹介しましたが、その後、江戸東京博物館・すみだ郷土文化資料館との協同で分析を進めて「空襲被災地図」を作成しました。今回はこの「空襲被災地図」をコア資料とした三館合同展示という形式をとりながらも、当館独自のデータ分析も加えて、四月一日の「山の手空襲」について、同様の分析を試みようと思います。

▲5▼ 被災者の記憶

そして、最後に「空襲体験画」の展示です。展示された絵を通して、制作者の戦争や空襲に対する思いを少しでも伝えることができると考えています。

以上が現在計画中の展示の概要です。現在、展示初日を目指して、調査中の展示部分も含めて、鋭意準備を進めている最中です。なお、今後の準備の過程で、開催までの間に、展示のコナー構成が一部変更される場合もあります。ご了承ください。

（伊藤）



長崎村〈動物〉物語

民話「ちいさい桶」

昔、長崎村に半五郎さんという桶屋が住んでいました。ある月夜の晩、千川上水の土手を歩いていた折、庚申様や土地蔵様のある北原橋のそばで大きな川獺（かわくさ）がむじなの子を水の中に引き込もうとしていました。半五郎さんはそれを見て、川獺めがけて石を投げ、むじなの子を救ってやりました。半五郎さんは「この付近は悪い川獺が住んでいて、人間もだまされてしまうのだよ。お前のような子供ではすぐ食べられてしまうよ。川に近づいてはいけないよ。」と注意すると、むじなの子は頭を下げて雑木林の方へ消えていきました。それから数日後、半五郎さんは名主さんからの注文である飯台がうまく作れず、徹夜で作業をしていました。すると「トントン」と表戸を叩く音がして、戸を開けると、あのむじなの子がいました。むじなはかつての御礼をしたかったものの、川に近づけず、遠くから半五郎さんの家を毎日見ていたそうです。

今夜は遅くまで明かりがついているので、何が起ったのかと心配で見にきたとのが、昔は人を化かすという俗信があり、

こと。半五郎さんは仕事がかたらないことを伝えると、むじなの子は「わたしがお手伝いしましょう。」といつて、木を運び、竹を曲げたりして、せつせと手伝い始めました。半五郎さんも元気がつき、今までにないほどの出来栄えの、見事な飯台桶が出来上がりました。そして、むじなの子にお礼として小さな桶を作ってあげました。その後、月夜の晩になると、川でむじなの子が桶に乗って遊ぶ姿を見たと村人たちの噂になったそうです。〔当館特別展「長崎村物語」図録、一九九六年、より要約〕

この民話は、明治四十年生まれの田島五郎氏が幼少の頃にお父さんから聞いた話がもとになっています。かつての長崎村字北原近辺（現在の千早3・4丁目）が舞台で、豊かな自然のもとでの人々の暮らしや動物との親しい関係がうかがわれます。今回はこの民話に登場する動物について考えていきたいと思います。

カワウソ



カワウソ
（『日本野生動物記』より転載）

「老いると河童になる」という説もありました。現実には、水かきがある、頭部は河童の皿を連想させるように平たい、尾を支えにして立ち上がることがある、など、河童のモデルたるべき特徴がみられます。これらが、人間、特に子供を水の中に引き込む河童の姿に投影され、実は河童の正体はカワウソである、と説く人もいます。この民話でも「川獺がむじなの子を水の中に引き込もうとしていた」、あるいは「人間もだまされ」る、といった河童を連想させる記述があるので、その関係はここでもみることができそうです。日本固有種であるニホンカワウソは、明治年間にその毛皮が珍重されたために盛んに捕獲されて数が激減し、現在ではほとんど絶滅同然の状態です。

ムジナとタヌキ

一方、半五郎さんに恩返しをした「むじな」ですが、一般にはタヌキのことを指します。しかし地方によってはタヌキ

と形態の似ているアナグマのことを指す場合もあります。かつてタヌキを禁猟とする法令に違反したとして罰金刑を宣告された猟師が、自分の住む地方では「むじな」と呼んでいるので捕獲は違法ではないとして大審院にまで上告した事件までありました。つまり、捕獲した動物は実際には同じであるものの、呼称が違うために、猟師は違う種の動物を獲つたのだ、と主張したのです。古くから「タヌキみたいなもの」に対する呼称や認識にはかなりの混乱がありました。タヌキは雑食性で順応性が高く、近年では次第に都市部へ進出し増加しています。かつて長崎村とともに生活していたカワウソとタヌキは、種の繁栄という点においては、現在全く別々の方向をたどっています。

（藤岡）



タヌキ

アナグマ

（ともに『日本動物大百科』より転載）

石にたずさわる人と技

—— 雑司が谷・霊園周辺の石屋 ——

雑司ヶ谷霊園（南池袋四丁目）は、明治五（一八七二）年に開園されましたが、それは、もともと移野ではありませんでした。大部分が、御鷹部屋（將軍の鷹を飼育・訓練する機関）と雑司が谷村の中島御獄という集落の家々や田畑でした。その

の手桶を預け、墓参者はそこで花と線香を求める光景をよく目にします。

花屋と同じように、霊園の周囲には石屋も多くあり、一九三〇年代には一五件の石屋があったことが確認されています。現在も続く鈴木永年石材店は、墨田区本所で嘉永年間（一八四五―五四）から石屋をしており、明治期に本所界隈の寺院が東京市中から郊外へ移住することになったことと雑司ヶ谷霊園の開設による墓石の需要を予測し、現在地に移転してきました。また、兜木石材店は一九六五年頃まで開業していましたが、同店の初代は台東区谷中で石屋を始め、その後、高田の砂利場（南蔵院や水川神社付近の呼称）に移り、や

はり同地へ、明治末から大正初めに移転してきたといわれています。

志賀良男氏提供の写真は、昭和一〇（一九三五）年頃の志賀石材店です。家族は、前列三人（中央は店主）、職人は後列です。店主の志賀正人さんは、明治三一年、宮城県で生まれ、江東区方面の石屋で修業した後、昭和七年頃南池袋二丁目で店を持ち、雑司が谷一丁目23番で昭和三年頃まで営業していました。主な仕事は、霊園と宝城寺（南池袋四丁目）でした。では、写真の職人さんを紹介しながら、分業されていた石屋の仕事の一端をみることにしましょう。

写真左から、A・B・C・D・E・Fの職人さんとなります。Aさんは台東区浅草方面の石屋で仕事をした後、三〇歳頃から当店で住み込みで仕事をしていた。石を道具で加工する「石工」、石面を磨く「磨き」、石に文字を刻む「字彫り」という作業は何でもこなせる人で、戦後、当店から独立して寺院が集中する果鴨地域（寺の境内で石屋の店舗を持ちました。Bさんは東池袋五丁目に住み、

当店で仕事が生じたときだけ頼んだ字彫りが専門でした。Cさんも東池袋五丁目に住み、専門は磨きでした。Dさんは不明です。Eさんは南池袋二丁目に住み、石工と磨きをしていました。B・C・Eさんは、通いで仕事をしていました。Fさんは当店主人の妻方の親戚筋の人で、小学校卒業後から住み込みで働き、戦後当時から独立しました。

このように、霊園の誕生によって、これまでになかった石屋という業種が集まってきたことがわかります。また、分業で成り立つ石屋の仕事をするうえで、それぞれの職人さんたちが親方の家で寝食をとともにし、あるいは職・住接近の場所に住んでいたことも知ることができま。こうして、地域になかった新しい「まの顔」ができていきました。

ところで、駒込五・七丁目にも、明治初期に新設された霊園があります。いずれ、この染井霊園とその周辺についても考えたいと思っています。

*「江戸東京の諸職―東京都諸職関係民俗文化財調査報告―下」東京都一九九四年「雑司ヶ谷霊園の開設にともなう地域社会の変化」『豊島区立郷土資料館年報（付・研究紀要）』第11号 一九九七年を参考にしました。（福岡）

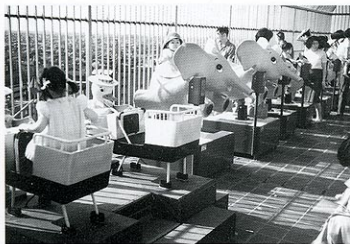


こが新政府の政策により墓地の造成が実施され、領域が次第に拡大されて現在に至っています。霊園の周囲には複数の花屋があります。馴染みの花屋に家紋入り

セピア色の記憶

第13回 「百貨店の屋上」のノスタルジー

左に示した二枚の写真は、それぞれほぼ同じ場所を撮影したものです。いずれも東武百貨店池袋店の屋上の様子ですが、上の写真は、上の写真は一九六二年六月（高木進一氏撮影）に、また下の写真は二〇〇五年五月に撮影したものです。上の写真欄沿いには、硬貨を入ると一定時間動く遊具が並んでおり、子供たちが乗って遊んでいます。また、柵越しに外の様子を眺める大人も確認できます。



東武百貨店池袋店は、一九六二年五月二九日に開店しました。売場面積一万七、一三〇㎡の小規模な百貨店ながら、八階部分の屋上遊園地、六階部分の名画劇場と結婚式場、五階部分のアイススケート場を併設し、「お買物とレジャーの総合的殿堂」として賑わいました。その後、隣接する東横百貨店（現東急百貨店 池袋店の買取（一九六四年）、増改築の実施（一九七一年）、プラザ館新築（一九九二年）



などを経て、約八万三〇〇〇㎡の売場面積を持つ現在に至っています。そして、かつての「屋上遊園地」は、「屋上ファミリーガーデン」として今も親子連れに親しまれています。

一方、下段に示した写真は、一九六二年八月の（高木進一氏撮影）西武百貨店池袋店の屋上（九階部分に相当）の様子です。柵に沿って大型の望遠鏡が配置され、子どもたちが覗いています。このこ

とは、当時、池袋駅周辺にあまり高い建物がなく、ここからの見晴らしがよかったことを示しています。また、この写真からは確認できませんが、東武百貨店の屋上と同様に遊具類が置かれ、子どもたちの恰好の遊び場となっていました。

さて、読者の皆さんのなかには、「百貨店の屋上」に特別な懐かしさを感じる方もいらっしゃるかと思います。ご幼少のみぎり、とある休みの日、よそ行きの服を着て、家族とともに駅の近くにある百貨店に買い物に出かけ、店内上層階の大食堂で、子供用の椅子に座ってお子さまランチとソフトクリームを食べ、屋上



の遊具でわずかなお小遣いを惜しみながら使って遊ぶ。一年のあいだに数度しか経験できない（もちろん各家庭の事情によつて頻度は異なりますが）貴重かつ贅沢な休日、はからずとも思い出してしまったのは、「あなた」だけでは無いと思います。さらに、自分は「三越派」だった、あるいは、「まるぶつ（現パルコ）派」だった、という「こだわり派」もいらっしゃるかも知れませんね。（秋山）
*本欄は、東武百貨店社史編集室編「グッドパートナーメント 東武百貨店三〇年の歩み」（一九九三年）の記述を参照しました。

郷土資料館からのお知らせ

郷土資料館年間事業予定

― 展 示 ―

◆第1回企画展 7月27日(水)～9月4日(日)「東京空襲六〇年」空襲の記憶と記録」

◆第2回企画展 1月25日(水)～3月12日(日)「(仮称)豊島の浮世絵」

*企画展は当館の収蔵展示室で開催されます。なお同所では、企画展以外の期間にはコーナー展示を行っており、7月中旬まではちよつとむかしの家電製品・豊島のもつくり「組紐」・むかしのくらし・東京空襲60年(第1回企画展のプレ展示)です。常設展とともにご覧下さい。

― 講 座 ―

◆地域史講座①「わかる豊島区3」

「前期講座4回」地域で豊島区を斬る。

6/25、7/30、8/20、9/17

「後期講座4回」資料で豊島区を斬る。

11/19、12/17、1/28、2/25

*いずれも土曜日午後2～4時

◆地域史講座②

「石の文化史」石工の仕事」

6/30(木) ガイダンス・7/2(土)

フィールドワーク(染井霊園と本妙寺)

◆都営交通車庫見学会「都電荒川線と都営地下鉄三田線」 8月に2回(予定)

◆歴史講座「戦地からの手紙」を読む

3月に3回(予定)

*講座の開催内容については、当館へ直接お問い合わせ下さい。また、「広報としま」をご覧ください。

― 資料調査・整理 ―

◆田嶋平良家長屋門所蔵資料の調査

寄贈資料群のデータ整理と原稿の執筆

◆榎本家文書整理 区内種苗榎本家寄贈

文書資料群のデータ整理

◆文芸生・内倉金網寄贈文書の整理

◆逐次区民寄贈資料の整理

◆図書・写真等のデータベース化にともなう蔵書・資料点検作業

刊行物

◆郷土資料館だより「かたりべ」(4回)

◆新着図書情報(毎月)

◆郷土資料館研究紀要「生活と文化第15号」

◆調査報告書第18集「(仮称)鉄道関係調査報告書」



編集後記

新緑が目にあざやかな季節となりました。今年度から二年間、編集を担当することになりましたので、よろしくお願いいたします。

今年もごらんの様に沢山の事業が計画され、すでに準備を始めています。例年とは違う時期に実施する事業や、博物館実習のようにできないものが、いくつかあります。それは、当館が資料の整理と撮影のために文化財係と共用してきた文化財資料調査室が、秋から使用できなくなるという理由によります。所在する資料の引越しや煙蒸作業等の実施により、利用者の方々に御迷惑をかけることがあるかと存じますが、ご理解をお願いいたします。(ふくおか)

かたりべ
No.78

2005年6月1日

豊島区立郷土資料館
豊島区西池袋2-37-4

電話 03-3980-2351
http://www.museum.toshima.tokyo.jp